

〔研究ノート〕

## 健康科学教育センター国際科の発展途上国における地域交流の現状 —国際交流事業の教育的意義の検討—

山田 典子<sup>1)</sup> 川内 規会<sup>2)</sup> 千葉たか子<sup>3)</sup> 渡部 一郎<sup>4)</sup> リボウィッツ志村よし子<sup>1)</sup>

### Current State and Expansion of Community and Cultural Exchange in Developing Countries through the International Affairs Section of the Training Center — A study of the Educational Significance of International Exchange Projects —

Noriko Yamada<sup>1)</sup> Kie Kawauchi<sup>2)</sup> Takako Chiba<sup>3)</sup> Ichiro Watanabe<sup>4)</sup>  
Yoshiko Leibowitz<sup>1)</sup>

#### Abstract

This study aims to review the community exchange projects in developing countries conducted by the International Affairs Section of the Training Center, and to discover our current/potential capabilities surrounding international exchange development and expansion.

Students tend to have a strong desire to study abroad and hope to be supported by their parents, teachers and staff. Therefore, we need to create more opportunities to provide students with information about studying abroad and encourage them to do so. Furthermore, the need to integrate the students' understanding of different thinking styles and methods, which they develop through their international experience, in ways which improve their professional skills became evident.

This study makes us continue to consider the advantages of future international cooperation during students' developmental years, seeing that, at this stage in life, students are more able to develop strong minds to overcome various problems via the difficulties they experience overseas. Additionally, study abroad experiences give students the chance to think about what qualities are important for Japanese to become more internationally minded.

We outline our endeavor to manage and implement international projects from an educational perspective.

(J.Aomori Univ. Health Welf 8 (2) : 267 - 274, 2007)

キーワード：発展途上国、国際理解教育、異文化体験

Keywords: developing country, international understandings, intercultural experience

---

1) 青森県立保健大学健康科学部看護学科

Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Aomori University of Health and Welfare

2) 青森県立保健大学健康科学部人間総合科学科目

Division of Human Sciences, Faculty of Health Sciences, Aomori University of Health and Welfare

3) 青森県立保健大学健康科学部社会福祉学科

Department of Social Welfare, Faculty of Health Sciences, Aomori University of Health and Welfare

4) 青森県立保健大学健康科学部理学療法学科

Department of Physical Therapy, Faculty of Health Sciences, Aomori University of Health and Welfare

## I. はじめに

平成 11 年度開学以来、本学では看護、理学療法、社会福祉の 3 学科独自のカリキュラムを履修することにより、「専門性 (Professionalism)」を育み、さらに相互の専門性を尊重しながら「連携・協調 (Coordination/Collaboration)」をはかり、ヒューマン・ケアを実践・統合できる人材育成を目指してきた。

ヒューマン・ケアを通し、「健康と生活の質の向上」に貢献できる専門職を養成しているが、それに加え文部科学省では、より世界的規模で活躍できる人材育成を目指し、日本学生支援機構を発足させ、留学生に対する総合的な支援体制を整えている。具体的には、平成 16 年度に入り留学生の受け入れ・派遣の両面で一層の交流の推進や日本人の海外留学への支援、および各大学等がより主体的な役割を果たすなどの支援体制の強化を踏まえ、「長期留学生派遣制度」や海外留学のための貸与制の奨学金制度を創設した。

このような国際社会への進出に追い風が吹いているものの、実際に留学するには本人の強い意志や親のサポート、および大学教職員の支援が欠かせない。実際にこれまで学生の留学相談を受けた教員から、短期海外研修やスタディツアーのような、海外での学習意欲を持つ学生の後押しをするワンステップがあることが望ましいという声が青森県立保健大学健康科学教育センター国際科内 (以下、「国際科」と略) であがっていた。これらの動向を踏まえ、本稿では本学の国際科地域交流事業の現在の取り組みから、さらに拡大・発展の可能性について探求することを目的とする。

## II. 国際理解教育の現状 一国の動向一

### 1. 初等中等教育分野などでの協力強化のための「拠点システム」事業

平成 14 年度から小中学校で、平成 15 年度から高等学校で新学習指導要領の実施に伴い取り組まれている。高校生の留学や海外修学旅行では、外国人との交流の機会や外国の歴史・文化等に接する機会を得、国際理解を深めることを目的としている。

安全の確保面では、計画段階における準備の万全を期するとともに、万一事故が発生した場合の大使館等関係在外公館における迅速かつ適切な対応を図れるよう、外務省と連携して情報提供体制の整備に努め上記事業を推進している。

平成 14 年度文部科学省は「英語が使える日本人」の育成のための基本戦略として、以下の行動計画を掲げた<sup>1)</sup>。

- ① スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール

- ② 語学指導等を行う外国青年招致事業 (JET プログラム) の推進

- ③ 英語担当教員の資質向上

- ④ 小学校における外国語学習

経済や医療等の様々な面で国際化が急速に進むなか、21 世紀を生きる子どもたちが広い視野を持つとともに、国際的な理解と協調を図る上で大切な英語のコミュニケーション能力を養い、身に着けることが重視された取り組みである。

### 2. 日本の知的資源を国際協力に活用していくため、大学における国際開発協力を推進する「国際開発協力サポート・センター」の整備事業

文部科学省は、国際協力教育に実績のある広島大学と筑波大学を中核に機関に、国交私立大学や N G O、民間企業などからなるネットワークを形成し、関係機関の協力の下で事業を進めるべくシステムの構築を図ってきた。

このような動向の中、本学では国際理解協力を経てきた学生達を受け入れ、さらに高度な学習に移行していけるよう、教育的配慮を施した国際科の取り組みについて以下に報告する。

## III. 大学教育レベルでの取り組み ～本学国際科の実践～

1. 期間：平成 18 年 8 月 5 日 (土) から 12 日 (土)
2. 研修先：インド国西ベンガル州コルカタ街と郊外農村
3. 研修目的：インド国西ベンガル州ヘマザー・テレサの家でボランティア活動する学生を引率するための事前準備
4. 訪問国の概要

インド国内では、カシミール地方におけるパキスタンとの確執による武装闘争、土地や民族の帰属問題によるアッサム地方における不穏な動きなど、いくつかの不安材料はあるものの、西ベンガル州は安定しており、治安が良いと言われている。パキスタンとの関係も、両国を移動するバスの運行が再開されるなど、改善の努力が進められており、悪化することはないだろうという見方が一般的である。

コルカタは、インドでは大きな街で、政治の中心であるデリー、経済活動の活発なムンバイ、IT が盛んなバンガローレに対して、文化の中心とされる。

### 5. 交通に関して

青森からコルカタへ行く場合、韓国 (インチョン) 経由と成田経由の 2 つのルートがある。実際 2 つの経路を試したところ、韓国 (インチョン) 経由の方が、負担が小さく、時間的にも楽である。また、途中ルート変更をせずに、直行でコルカタへ進み、直行で帰国することが、

身体的にも経済的にも負担が少ない。

#### 5-1. 韓国（インチョン）経由

青森～韓国（インチョン）～バンコク間は、大韓航空を利用し、バンコク～コルカタ間はインディアンエアラインズを利用する。このルートは、青森からコルカタへ行く場合、一番便利だと思われる。青森空港でチェックインの際、荷物を青森からコルカタまで直接運んでもらえるので楽である。帰りもコルカタから青森まで直接送れる。難点は、毎日、飛行していないので、旅行予定期間、出発日、帰国日の日程調整が難しくなることである。なお、飛行時間は、おおよそ、青森～韓国（インチョン）は、2時間15分、韓国（インチョン）～バンコクは5時間、バンコク～コルカタは2時間半である。

#### 5-2. 成田経由

青森～成田～バンコクは、JAL、Northwest、タイ航空など利用できる航空会社の選択肢は増える。しかし、青森から成田へ出る場合、JR利用だと八戸駅と東京駅での乗り換えがあり、航空便利用の場合は、羽田へ飛び、羽田から成田への移動となる。いずれも、成田への移動は面倒であり、経費も大きい。また、荷物を持って移動する場合は、2回の乗り換えが必要となり負担が大きい。自宅から成田空港へ宅配もできるが、2-3日前に宅配に出すこと、そして送料がかかる。なお、飛行時間は、成田～バンコクはおおよそ6時間である。

#### 6. 過去における海外ボランティア体験ツアー

コルカタのマザーは、あまりにも有名で、マザーの施設でボランティアとして働くために外国から、若者を中心に多くの人たちが訪れている。街の人々は皆、マザーを知っており、このボランティアたちは既に、コルカタの人々の中に位置づいている感がある。夏休み、冬休み、春休みなどの期間には多くのボランティアが集まり、登録数は千の単位を超えると推測される。本学国際科委員は、過去17回、コルカタを訪問しているが、毎回、マザーの家でボランティア活動をする日本人と出会っている。ボランティアたちは、個人で来る者、学校のサークル活動などグループで来る者、団体で来る者など様々である。日本の女性が単独でコルカタを訪れ、気軽にコルカタの街を歩いているのを毎回見かける。これは、コルカタの街の治安の良さを反映していると考えられる。

結論として、本学の学生が、単独でコルカタへボランティア活動のために訪問しても不安はないということがとりあえず言える。もちろん、安全確保のために、単独ではなく、2-3人のグループで行くことが望ましいのは当然のことである。また、コルカタへの旅行は、自己管理ができると思われる年齢のとき、すなわち2-3年生になった時が望ましいかもしれない。このような状況であるので、事前のガイダンスの充実が必要なのは言う

までもないが、教員が日本からコルカタまで引率し、学生がボランティア活動をしている日々、共に生活をして、面倒をみるという必要性はないと思われる。

#### 7. マザー・テレサの家でのボランティア体験

マザーの家と一般的に言われている施設の正式名称は、Missionaries of Charity である。コルカタには、11の施設があると言われるが、ボランティアを受け入れているのは、7ヶ所のようなものである。この中で、一番有名なのが⑤のカリガートである。

- ① ダイアダン（Daiya Dam）子どもの施設：身体・知的障害者
- ② シシュババン（Shishu Bhavan）子どもの施設：障害児
- ③ シシュババン・ハウラー（Hawrah Shishu Bhavan）子どもの施設：孤児と貧しい家庭の子
- ④ ナボジボン（Navo Jubon）子どもの施設：障害児
- ⑤ カリガート（Khalighat）「死を待つ家」で有名
- ⑥ プレムダン（Prem Dam）大人の施設：病氣の人
- ⑦ シャンティダン（Shanti Dam）大人の施設：知的障害のある女性

これらの施設には、世界各国からのボランティアが集まっており、当日は、イギリス、フランス、イタリア、スペイン、ギリシア、韓国、台湾から来ている。ほとんどが20代～30代前半とみられる若者である。医師・看護師のような資格は特に持ち合わせていない者が多い。大抵は休暇をとって、最短1日、長期になるとコルカタにアパートを借り、数年に渡り住み着いてボランティア活動を続けている人もいる。おおむね、2週間～1ヶ月くらいの期間が平均的なようだ。マザー・テレサは世界的に高名で、その偉功をしのび、これらの施設では世界からボランティアを集めている。

ここでボランティア活動するためには、事前学習として、キリスト教、特にカトリックに関して勉強することが望ましい。施設内で行われる祈りの時間、マザー・テレサ理解、キリスト教の教義、聖母マリアなどの知識がボランティア活動を充実させる。キリスト教がその社会に根づいている欧米の人と異なり、一般の日本人はキリスト教徒ではないので、まずキリスト教に触れていくべきだと考える。

さらに、将来保健医療福祉の領域で働くであろう学生達には、アルマ・アタ宣言に謳われたプライマリヘルスケアの理念について、もう一度教科書を紐解き途上国理解を深めて欲しい。「自助と自決の精神に則り、地域社会または国が開発の程度に応じて負担可能な費用の範囲内で、地域社会の個人または家族の充分な参加によって、

表1 健康科学教育センター国際科委員が視察した施設の特徴

施設名	特徴	備考
カエトプク ール集落： 農村	コルカタから急行で2時間余りの所にある大学の街、シャンティニケタン近郊の農村である。サービスセンターが活動している農村である。ここでは、女性たちから説明を受けながら、彼女たちの活動の様子を聞き、現場を訪問した。	これまでも数回、学生を農村へ連れて行ったことがある。農村開発の現場は、学生は強い印象を与えるようで、是非、農村訪問をツアーに入れるようにと要望されている。
シュクシャ ミットラ： 教育の友 NGO	コルカタ市内のNGO。小学校に1-2年しか通わなかったイスラムの少女たちを対象に、教育活動を行っている。具体的には、識字教室で簡単な読み書き・計算、手工芸クラスで刺しゅうなどを教えている。	日常生活に関わる簡単なお金の計算や、買い物の仕方、調理実習など、子ども達と共同で学べる。階層社会の現実を知り、文化理解に役立つと思われる。
Southern Health Improvement Samity： 眼科と産婦 人科がある 病院 NGO	コルカタの南方、イスラムの居住地にある病院。特徴的なのは、診察車をもって、更に南方の島嶼部へ巡回に行くことである。世界各国からの学生が研修に来ているということで、訪問時には韓国と北欧の国からの学生がいた。	病院に滞在しての研修は難しいが、巡回車に乗り、農村部へ訪問する保健活動への参加は本学の学生にも大きな研修となると考えられる。病院敷地内に水質研究所などもあり、環境と健康被害についても学べる。
National Institute of Behavioural Science： 精神科の病 院 NGO	コルカタ市内にある精神科の病院である。医者は、治療の他に研究にも熱心で、国内及び国際的な学会で研究発表している。臨床心理室など整備されており、近代的なクリニックである。	本学の学生の研修の場としては、言語の問題があり難しい。 この病院も農村を巡回しており、それに同行して活動を観察することは可能である。
アンクール カラ： 希望の種を 蒔く NGO	暴力にさらされている女性のためのNGOである。女性のエンパワーメントをねらいとし、瞑想・識字教育・収入創出のための職業訓練などのプログラムがある。	ここは、学生の評判が高い所である。 保健福祉の学生が、支援者としてのエンパワメントについて、考え学べる場として期待できる。
カルカット レスキュー： 病院 NGO	アイルランドの医師が始めた病院。診療所は、コルカタ市内に10ヶ所ほどある。治療活動の他に、母親のための保健・健康教室、子どもたちへの教育活動、大人へ収入創出のための訓練などを行っている。	母親のための健康教育など行っており、ヘルスエジュケーターとして、その実践から学ぶことが大きいだろう。看護学科、栄養学科の科目に健康教育論があるので、対比して学びが深められる可能性がある。
サイレンス： 施設 NGO	聴覚障害者の施設で、職業訓練を中心にを行っている。	障害者の自立支援の、就労支援の実際が見られ、訪問先としてふさわしいNGOである。

彼らが普遍的に利用できる実用的で科学的に適正で、かつ社会的に受け入れられる手順と技術に基づいた、欠くことのできないヘルスケア」について、事前学習し自分なりの課題を持って臨んで欲しい。

#### 8. 訪問先について

インドには多くのNGOが多様な活動を展開しており、西ベンガル州、コルカタ市内においても数えきれないほどのNGOが様々な活動を展開している。よって、本学の学生がインドに研修に行く場合のねらいを絞り込めば、その目的達成のためにふさわしいNGOを大きな選択肢の中から選ぶことが可能である。

#### 9. フィリピンマンドラウエの視察より

青森県内で唯一 JICA と発展途上国支援を実践している団体として、NPO 法人クオレセブがある。NPO 法人クオレセブはフィリピンマンドラウエ小学校において、障害児(者)の授産施設としてパン工場の建設、小学校特殊学級担当教諭の県内授産施設の研修などの事業を進め、現地で採算がとれるパン工場が稼働している。

平成 18 年 6 月 20 日、マンドラウエ市教育長のクオレセブへの訪問時期に合わせ、当学教室で同市の小学校就学率、障害児についての講演会と、さらに研修中のマンドラウエ社会福祉士 1 名、特殊学級教諭 2 名と当国際科・学生との討論会を行った。

平成 19 年 3 月には、教育センター国際科委員 2 名(JICA 草の根事業 1 名分支援)が、同地域セブ市・マンドラウエ市・ラブラブ市の日本領事館、保健所、社会福祉施設、スラム地域への保健(教会のフリークリニックの状況)・支援状況、小学校障害児教育事情と NPO クオレセブのパン工場事業を視察し、当学の貢献分野、体制整備など検討するための調査を進めた。さらに、同年 8 月には、国際科委員 3 名がフィリピンのサウスウエスタン大学、ハンセン病の病院等をまわり今後の発展性について検討を始めている。

### IV. 学生の発達段階から大学における国際開発協力の推進の意義

#### 1. 大学における国際協力の推進の位置づけ

知的資源である大学による、国際機関や開発援助機関の途上国開発プロジェクトの受託を促進するため、文部科学省では平成 15 年度から「国際開発協力サポート・センター」を設置し、①大学による途上国開発プロジェクトの受託支援、②国際開発協力に関心を有する大学や教員のデータベースの整理、③大学や教員の紹介を通じた国際機関や開発援助機関との関係の構築、④広範なニーズに対応するための大学間や大学とコンサルタント企業、海外の大学および NGO との連携の促進、⑤国別・分野別の国際協力ネットワークの形成を

支援している<sup>1)</sup>。

このように、大学による途上国開発プロジェクトの受託を推進することは、①学生に対する実践的な教育の提供、②大学の国際競争力の強化、③大学による社会貢献の促進などに寄与する。また、大学と援助機関との安定的な協力体制を構築することにより、大学のみならず日本国として、大学の知的資源を開発援助に一層活用することが可能となる。

また、将来、保健福祉医療分野で働く事が期待される本学学生にとって、厚生労働分野の国際的潮流も見過ごすことは出来ない。1993 年の世界銀行報告書によると、健康への投資による健康水準の向上が、社会・経済の発展にとって必須の前提条件であるとの立場に立ち、健康を投資対象と位置づけた。これ以降、保健・医療分野では地球全体の課題としての参画を国際社会から要請されるようになり、世界保健機構(WHO)、国連合同エイズ計画(UNAIDS、1996)、ストップ結核パートナーシップ(1998)、世界エイズ・結核・マラリア対策基金(2002)といった新たな組織や枠組みが立ち上がり、過去 10 年余の変貌は著しい。

#### 2. 本学の海外研修(学部のみ)の現状

① 語学研修・・・全学部生対象にオーストラリア(2月)、イギリス(8月)での語学研修を実施。ホームステイによる異文化を体験する。研修参加は卒業単位として認定される。

② 韓国研修・・・理学療法学科では、相手国と双方で研修生の交換がある。病院見学等1ヶ月前後の見学、講義、実習を経験する。この研修も単位として認定される。

③ インド研修・・・本学国際科委員の個人研究に同伴し、マザー・テレサの施設でボランティア等を通じ異文化を体験する。希望者対象に国際科教員が情報提供や支援をしている。単位認定なし。

#### 3. 他大学の海外研修の現状

A 大学:アメリカやオーストラリアの看護事情を体験することにより、看護に対する興味と関心を高め、専門職業人としての自己成長に向けて主体的な学習態度を培う動機付けの機会とする。

B 大学:国際協力活動を視野に入れたカリキュラムで、異文化看護の基礎理念や母子保健の現状と問題点を学ぶ(途上国)。

C 大学:学部生、院生を対象に、卒前から卒後の現任、大学院教育(修士)において、国際医療協力が出来る人材の育成と、そのプログラムを開発する。

上述のように、多くの看護系大学では、学部生段階で国際看護あるいは異文化看護の科目をおき、国際医療協力活動の動機付け<sup>4) 5)</sup>や人材育成を行っている。

#### 4. 青年期に海外に行く意義

次に、青年期に海外で異文化を直接体験することの意味について考えたい。

一般にこれまでなれ親しんできた環境と異なる環境に置かれた場合、人は先の見通しが立たないことから来る不安や戸惑いを感じる事が往々にしてある。異なる文化との出会いにおいても同様に、戸惑いや緊張状態に置かれることが予想できる。自分の物の見かたや考え方、そのに基づく行動や価値観など、あまりにも当然の事として疑うこともなく意識にさえも上らなかった物事が、異質の文化との出会いを通して、一つ一つが吟味され、検討がなされることになる。それは日本という特定の文化の中で培われてきた自分自身を振り返り、見直す機会になる。

さらに、発展途上国に行くことは上記の異文化体験に加え、どのような意味があるのか考えて見たい。英語以外の現地語が存在する場合、言葉の問題が第1にあげられよう。生活面では、治安、公衆衛生、交通・通信手段、食事、プライバシーの確保等、予想外の状況に戸惑い、カルチャーショックに陥ることも想像に難くない。行動様式の相違から誤解が生じ、不信感を抱き孤独や人間関係でおちこむ事もありえる。

このような体験は青年期の学生達にどのような意味をもたらすのだろうか。異文化とのふれあいで感じるものの多い、孤独感や共感性について整理する。

##### ① 孤独感について

思春期以降の発達段階で孤独感を感じさせる心理的要因は、対他次元の要因、対自次元の要因、時間的次元の要因の三次元に分けられる。

対他次元の要因とは、人との関係に関わる要因である。人には自分の気持ちが通じない、人の心はわからない、人に裏切られた、誤解されたなどの経験が、孤独感を感じさせる要因になる。

対自次元の要因とは、自分のあり方について考え、自分は他者とは違う、他者には取って替われない存在であることを自覚するようになる。しかもそれは自分ばかりではなく、誰にでもあてはまることであり、人は個別な存在であることに気づくようになる。これが孤独感を感じさせる対自次元の要因とされる<sup>2)</sup>。青年期の孤独感には対他次元の要因と対自次元の要因が主にかかわっていることが明らかになっている。

##### ② 共感性について

社会心理学や発達心理学における「共感」の一般定義は、「他者の感情体験を観察した側におこる、他者の状況に対応した代理的感情反応」となっている。共感が起こる際には、他者の感情を認知する能力、他者の視点・役割を想像する能力、感情的反応性の3つが必要である

とされる。

人には人と人を結びつけるための共感性が生き残りのために進化的に備わっているといわれる。ホフマン(Hoffman, M.L., 1987)によれば<sup>3)</sup>、共感的苦痛は、はじめは他者の苦痛を見ることが直接の手がかりとなり自動的に起こるが、経験によってさまざまな連合が生じ、言語を媒介として、あるいは自分が他者の立場にあると想像する役割取得によっても起こるようになる。また、他者についての認識が自他融合から自他の区別、他者の内面や同一性への気づきへと変化するのにともない、自己中心的な共感から、他者の感情や他者のその場を超えた状況に応じた共感(同情的苦痛)へと変化するという。共感性は、向社会的行動の愛他的動機、攻撃性の抑止力として特に注目されている。

同情、思いやりなど、共感性と関連する概念が含まれているが、カウンセリングでは共感と同情は明確に区別されている。

学生は、本学での学びをもとに、知識や技術を用い相手国の文化や環境に合わせて活動する。この経験は、異文化を理解し、その障害を乗り越えて活動する意志と思考力、厳しい生活にも耐えうる健康な身体の必要性を痛感することだろう。そして、日本人が国際的に通用する資質とは何か考える機会を与え、それ以降の様々な学習の動機づけになりうる。これらの発達課題を鑑み、今後も拡大を図っていきたい。

#### 5. 他国で自己を見つめ、外側からの視線で自国を見つめなおす

かつて戦後の日本国民は、戦争の惨禍と植民地時代の負の遺産のため、劣悪な経済・生活環境の下、健康水準もきわめて低い状態にあった。現在でも世界を見渡すと戦争で国が荒れ果て、復興のため欧米を主とする先進国が途上国に対し、様々な援助を行っている。

1978年にWHOの強力なリーダーシップのもと、プライマリヘルスケアが提唱され、地域レベルで包括的なケアを推進していくことが、国の保健システムに位置づけられた。それから既に30年が経ち、我が国の保健政策の潮流はヘルスプロモーションやセーフティプロモーションに移行しているが、これらの根幹に当たるプライマリヘルスケア実践から、欧米における保健医療の公正さの確保を重視する考え方、健康政策を社会開発の一環としてとらえ住民参加を基本としている点、限られた資源を有効に活用しながら、保健医療以外の分野も巻き込み、政策として取り組むことの重要性がみえやすい。異文化体験を味わい、保健医療福祉に関する施設を見学することから、適正な技術を用いて住民ニーズに沿った基本的な保健医療サービスを提供するとはどういうことなのか等、考える機会が得られる点が、国際交流事業の教

育的意義の核心である。

## V. おわりに

大学のグランドデザインを鑑み、国際科としての中期目標を作っていく過程で、「学生は外国に行きたいという気持ちがあるが、それを助ける手段がない」「国際科が窓口となって学生を派遣できるシステムがあればよい」という、独立法人化に向けて様々な発展を視野に入れた準備の必要性が確認された。

マザー・テレサの家のボランティアのスタディツアーは、個人としての関わりから大学としての関わりへ発展させる可能性を含んだ取り組みである。しかし、現状のスタッフでは限界がある等、多くの課題を有している。しかしこの課題を乗り越えていくことで、将来的に ① 学生が留学できるシステムづくり ② 発展途上国への支援 ③ ベレノバ大学、仁済大学校等、他大学との交流の発展を支えるものになると期待できる。そのためにも国際科が支援する海外研修の単位の認定について早急に準備をすすめていく必要があると提言し本稿を終える。

(受理日：平成 19 年 11 月 17 日)

## 引用・参考文献

- 1) 文部科学省：文部科学白書（平成 16 年度）、349-351、2005
- 2) 久世敏雄、斉藤耕二監修：青年心理学事典、福村出版株式会社、2000
- 3) 藤永保、仲真紀子監修：心理学辞典、丸善株式会社、2004
- 4) <http://www.jrckicn.ac.jp/international-104.html>
- 5) <http://www.seirei.ac.jp/web2/s09/a01.html>